冰魂記

保田與重郎

白川書院

氷魂記

昭和五十三年六月三十日發行

著者　保田與重郎

發行所　白川書院　發行者／臼井浩義　東京都新宿區左門町三―四　電話／〇三―三五三―三三四四／京都市左京區北白川追分町八七　電話／〇七五―七八一―三九八〇　振替／東京九―一七六四五〇／京都九二二

©Y.Yasuda

冰魂記

戰後文學觀——7
感情——13
鶴の如く——16
面影・上方びと——18
夏の月——21
冰魂記——25
澤の螢——34
文人の信實——40
遊記山人の和歌——51
追悼記——57
稚國玉——61
懷友記——68
比庵先生のこと——71

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

三島由紀夫の死――79
棟方畫伯の書――86
亡き人の小袖も――98
わが心、中有の旅の空……。――102
畏き人――105
大なる國民詩人――108
時雨のころ――111
國がらの證――115
年の初め――118
「眞說石川五右衞門」解說――124
國の傳統について――130
露伴翁の吉野山狂歌――139
宮崎兄弟特輯號編纂の趣旨――144

その文學――150
伊東靜雄を哭す――158
利休と芭蕉――169
藤村の詩――181
飛雲閣と二條陣屋――197
古代の眼――203
國寶論――211
宗教について――217
生寫――232

冰魂記

戰後文學觀

戰後文學といふのは、大東亞戰爭終戰以後の文學の個々のことでなく、全體として何であつたかをいふことであらう。個々の作品から拔群を判別することは難く、一を批判して、全體を察するやうなことも、しばらく時を待つべきである。衆多く好む時に察し、衆多く惡む時にも察すといふ敎へは、附和雷同してはいけない、煽動に乘ぜられてはならぬと解した。二千五百年昔の聖人の敎へは、今日の敎へである。國や社會をなす人々の文明度が低い時は、一つことに一方的に昂奮し、人の煽動によつて己を失ひ、ゆれ動く。察せよといふことは、事に動ぜず、冷靜の判斷をなされよ、との警めだらう。三代の文明の恢弘は、前途遙かにて、人文と人心は二千五百年、何の向上もないことは、今日の世相が示してゐる。人文の濃度は、時によつて上下に振幅があるが、果して戰後三十年の世相はいづこを指向するであらうか。國史に顧みると、元和偃武より五十年にして、元祿の旺なる文物が開花する。戊辰役の後五十年は、大正中頃である。事情條件全く異る狀態の下の、今後戰後五十年は如何であらうか。こゝに云ふ五十年は、戰後三十年の今に於ける新世代の靑年が成長し、老いて朽ちるか、文明を展くか。戰後五十年の文明の成否を、今日に於て豫め見る。

近頃東京と大阪といふ二つの都會を通過する時、戰ひの終つた二三年頃の、この兩都の一望燒野原のさまを、つぶさに知つてゐる私は、目をみはつて回顧し、驚くのである。私は山中に似た都の閑地

に住して、都大路に他出することがないので、東京や大阪の町を通り過ぎる時に、このやうな季節離れの感想を今も味ふ。私は子供の時、西洋の寓話で、惡魔の云ふまゝに、魂を賣れば、金錢財寶を多く與へるといふ、惡魔の取引の話を知つて、それを理解することが出來なかつた。養痴半世紀を、世俗の中に過した果に、私はこの寓話のもつ眞實を思ひ知つた。古より傳はつた傳承は、後世子孫をあざむかずと、私は兩都の摩天樓をなす高層建築をながめながら、惡魔の取引の事實を、現實目のあたりに見る。私は眺めて感嘆し、慷慨せず、唾棄もしない。さういふ演技や小說の、今や虛妄なるを知るからである。現世相では矛盾である。

二千五百年前、神の子を稱した西方の聖人は、羅馬帝國の繁榮の中央で、富を卑しみ貧を讃へた。それは敎へたのだとも承つた。この人あつて、西洋人はかつがつ獸心を去り、人心を得たとは、わが上州の我國最大基督者の敎へられたところである。この言葉に、少年の私は驚き、多少昂奮したのである。長じて私は、ある時、狼に育てられた人の子が、つひに人間となり得なかつたといふ事實をきいた。その少女が、人間となつたか、なり得なかつたか、その判斷の學說は、私の自ら解し得ないところだが、象徵的に、私見とするところがある。この時わが今生世界で、文明は消滅し、漸く虎狼の吠聲の界裡に娛樂は向ひつゝある。人は人の自由を尊重すると唱へたが、未だかつて虎狼の自由を許さなかつた。虎狼の自由を尊重する思想と實踐は、東洋聖者の流儀にはあつたやうだが、その根柢の思想を考へると、自由といつた功利の考へ方など、悉く放下された次元の世界のものである。この世界は、文明の彼方、文學の他界と考へるより他ないと私は思ふ。その次元では今生の私はなり立たないのである。現勢の別次元を表現するといふ、方今勇敢の人士も、その現狀は間違ひ、誤解、矛盾の一杯である。いけないことは、彼らは、神聖と一體として、宇宙の遠方の無に還らんとするのでなく、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

惡魔との取引を、內心から、おづおづと願つてゐる。中世アシジの聖者の徒をつぐものの有無を云へば、今の亂世に、存在せぬといふ方が信じられない。その淸楚と高貴と、貧乏と無所有は、人がそれを仰ぐまで、自身では顯示されないだらう。當然ながら顯示出來ない。

わが文學はもともと人におしつけるものでなかつた。日本の文學の本願は、いつの頃から忘失されたのであらうか。恐らくこれこそが戰後文學である。だから私は過渡期と思ふ。まだ何も顯示に達してゐない。この過渡期の文學が、共產主義流の獨裁思想を旨としてゐるのは、それが素朴な思考と方法論でなり立つてゐるからと批判されてゐるが、それよりも共產主義的人間といふ種族がはびこつてゐる現狀である。右左は云ふが、十九世紀的敎養の精神とは、無緣な存在の時代である。右左といふ、對立の精神文化上の地盤のないところで、保守といひ改新と云つてゐる。主義を論じ、宗敎を論ずる集團の指導者の顏貌を見るに、本來の宗敎とか主義思想と云つたものの、高邁な色合ひや、匂ひ深みは、毛筋にも現はれてゐない。そのなすところは論外だが、そこに戰後文學は依存してゐるのである。私にはさう見える。

傳統的に日本の文學の本願としたものは、幽玄とか、餘韻とか、陰影とか、多少色あひはちがふが、もののあはれの本意は、人の思ひをひき出し、わが思ひをおしつけるものでなかつた。事を敍して、おもひやあはれは、人に委ね、各人のおもひやあはれのまゝに、一つとなるところで、作者は十分滿足だつた。とりとめない人生の經驗といつても、自立自營、世の中の風波に向つて、わが身一つを挺して生きてきた世上の人の誰彼でも、ご近所の小說作者などに作ることの出來ない小說の一つ二つは必ずもつてゐる。たゞの一句でさういふ、今生の人の、一期の小說を引き出してやることこそ、作者稼業の冥加といふべきものである。詩人のつくれない詩の一つ二つを、むかしの旅びとはみなもつて

ゐたものだ。さうでなければ、人麿や赤人、芭蕉と云ふ大詩人の出現は考へられない。わが神ながらの他力本願を、明治のつはものたちは、非力非情熱と思つたやうである。この文明開化觀から、こぶしをふりあげて旗を振つて、强がつてみたり、張り子の虎が人に嚙むやうな、妄想の錯覺が生れた。躰をはるとか、命を賭けるなどといふ、そのかみ士君子令夫人の、口にし得なかつた言葉を、得意輕率に云ふのは、文學でない。

押しつけの文學も、教育の普及せぬ地域では魅力を發散するのか。人の心の小說文學をひき出すやうな文學は、時代條件の中で、大衆動員の旗ふり的な魅力のやうには、見えないのである。以前のある一頃、文學論に指導とか、啓蒙とか云ひ、やがて當人たちが、少々その言葉に恥かしさを感じて、政治意識などと云ひかへた。いつの時代を見ても、職業作家といふものは、世上の自主自立の常人を輕蔑してゐる。獨善的で、自分は常人より優越してゐると思つてゐる。江戸の戲作者は、權門勢家、政治家や財閥をひそかに蔑視したが、富豪に媚びる作者の方を、えらい作家と思ふ大衆も多かつた。明治の文豪は、政治家の大臣を無視し、名譽稱號の類を嫌つたが、戰後文學は、さういふ浮世の榮譽や、權力者と相通じるやうな特權を願望としてゐる。この現象は、大東亞戰爭中の軍部が、文士藝人を優待した風儀が、戰後、洪水の如くにひろまつたのである。氣象臺の發明か、集中豪雨といふ言葉が流布してからは、今の世の中、善を見ることはないが、だが小さい親切も小さい惡も、集中豪雨といふ言葉でとりしきることが出來る。

明惠上人は、平安末期鎌倉初期の亂世相を觀じて、今の世、大惡の者がゐないから、亂世は治らぬと申されたことに、以前私は感銘した。今日の世界中の現象を批判すれば、この一語につきる。亂極つて治到ると、芭蕉は亂を好む人の如く、未徵の現象に面して、つぶやく。精神界の大醫である。ま

ことに稀代の魂だつた。そして私は、芭蕉のつぶやきを、世の中の立命とし、わが安心としてゐるのである。私が半世紀の生涯に出あつた人々の中で、一人の相場師は、芭蕉の一句にいのちを托して世を渡つてきたと云つたが、一人の俠客は百人一首公任卿の歌一つを信條として、斬り合ひの場をかけぬけてきた。名こそ流れてなほ聞えけれ、と己の死んだ形を、相手の中に貫いてきたと云つた。死にものぐるひではなく、もう死んでゐるといふ狀態で突進するのは、關原の戰場で敵中央を脫出した島津の軍隊のやうだ、と私は云ふ。勇ましくも悲しくもない、何もない突進だが、敵味方ともに傷つく。人の生涯と今生の生命も、大聖の目で見れば、おしなべてかゝるものかとも思ふ。それを意識した者が英雄となる。俠客である。

人麿や芭蕉のやうな人は、彼が呼吸してゐた同じ太陽の下の生活者に、はかりしれぬ安心を與へ、慰め、樂しませ、生命のよろこびや、甦生の機緣を與へたのだが、千百年の後の今も、さらに未來百千萬年の後も、日本人のある限り、國人に安らぎと慰めと、生甲斐と、この世この國に生れた喜びを與へてくれるにちがひない。文學の信實とはさういふものだつたのである。

昭和の始め、日本の無產者文學が國際無產者作家同盟の支部を稱してから、文學者は指導者や啓蒙家となつた。それは文學的な意識からでなく、單純な政治權力の觀念から、指導者となり、不幸な大衆に優越し、それを口にしないが、態度生活で優越の極地を往來するやうになつた。この狀態は、賣文作者が權門勢家と同席交通するやうになつた戰後、一段增大した。しかもこの意識と時に矛盾する形で、文壇に出て、職業作家になるといふ、別次元の考へ方や思惑も出てきた。生活と交際に限つて考へてもよいのである。文學をなし、文學者となるといふことを、戰後過渡期文學では、如何やうに心得てゐるのか。單純なこととして、單純の面で批判することは出來るが、それでは意味がない。文

壇に出るといふ意識は、奈良京の都の文壇に、すでにあつたことにて、世の變移のけじめけじめに、例へば貫之卿の出現のやうな形で革新される。この復興が日本の文學史であるが、近來の文壇に出るといふ意識の變化を、學術的にしらべるやうな仕事を、今日澤山出來た大學校の女子學生などが、男教授の指導下にしてもよいと思ふ。しかしそれを指導する男子の教授を私は知らないのである。

戰後文學の作品は澤山あり、さらに澤山つみあげられることだらう。今や大企業である。しかしつひのつまりに、三島由紀夫だけが文學及文學者として、後の世に傳はつてゆくだらう。彼は紙弊を作つてゐたのでも、銀行預金通帖の數字を書き加へたのでもないからである。現今の世俗を見てゐて、私はこんな佗びしい氣分になる。しかしこゝで三島氏を思ふと、老殘なほかつほのぼのとしたわが若年の血氣と、彼の少年期のかぐはしさを印象するのである。戰後文學はあと二十年に、萬代の國と民のよろこび祝ふ如くに開花するかどうか、今はまだ若木、その若木があるだらうか、どうだらうか。昔、戰國亂世の文人松永貞德は、若木の下で笠をとると云はれたが、元祿の多數の巨人は、みな貞德の日の若木だつた。私はいのちを欲しいと思ふよりも、これを見とゞけるために生きたいと思ふ時がある。

五十一年九月

感情

「生は國歌を破壞し盡すの考にては無之、日本文學の城壁を今少し堅固に致し度、外國の髯づらどもが大砲を發たうが、地雷火を仕掛けようが、びくとも致さぬ程の城壁に致し度心願有之」と、子規は和歌革新に當つて述べてゐる。この一句にふくまれたものは、明治の士人の心底である。子規の大方の感情がこもつてゐると、私の若い日に、感じたことである。爾來四十年、私は子規の享年三十六歳といふことを只今も考へて、今世の中にある不思議と驚異を痛感する。そして四十年前のまゝに多分の感慨を味ふ。

近代の文明開化以後の文人學者をながめると、その人物のたゞものに非ずと見える稀代の人は、みな封建の教學と風懷の生んだものとの感をうける。この封建の教養は、封建制度云々といつた觀念論にかゝはりない世界である。近代的後進國の民族主義傾向などといふ、輕薄な公式論で片づくものでは勿論ない。さういふもので片づけ得ると思つてゐる輕薄者が今日は多いと聞くが、さういふ低俗思考からは、創造や生命は、毛頭も發揚しないのである。勇氣を藏し、心ある若者は、さういふ低級な思考とたたかふなどといつた、同次元の爭論の愚を早く悟るがよい。このことは三十歳にならない子規が、我々の「青年」に教へたところである。

子規の生命の一年間は、尋常人の二年にも、百年にも匹敵したとも考へられるが、かういふ比較も

殆ど愚に近いであらう。子規を文藝批評として語るやうなことも、今に於て愚者のわざと思ふ。伊藤左千夫が、子規を追想して、何ともえらい人だつた、と云つたといふ一言が、今の私にもおしつめて云へる一ことである。まことに大なる人物であつた。その作品や仕事を、分析したり理解しようと努めて、その後の結論として云ふ類のことではなく、子規その人の全像について、その人は正に英雄である。少しさきの時代の吉田松陰の偉大さは、英雄といふ言葉で云ふにはそぐはないものを感じるが、子規の場合は、その短命と、病患といふ悲運を背景として、わが日本の精神の歴史の上で、私にとつて、最も身近に生身のつながりの味へる英雄である。同時代の明治の文人の中では、岡倉天心にこれに多少似たものを感じた。この兩者の、日本の文學についての觀念や、美觀に對しては、私にはいくらもの批判がある。不遜の云ひ方をすれば、その單純さや片寄りも論ずることが出來る。しかしさういふ凡百の議論の雲海の上に、子規の如き存在は、高く聳えて黄金の輝く陽をうけた大塔と望まれる。世俗の雜音など何一つ、よりつき得ず、とゞくものではないのである。かういふ人物に對する後代の人の態度は、その後の人の文士たるの品性のほどを明白に現すものである。

子規が殆どその全生涯ともいふべき苦しい病患のたゞ中で、純粹の一途にゐて、現世の目的も慾望もなく、その心火を燃やしてゐたさまは、すでにその人を離れて、我々の拜跪したい理想と私は思ふ。私のこの見地では、かゝる人は、よし間違つてゐても、よし未熟であつても、またしかく批判できても、結局その人の場合は私に於て、すべて正しいのである。これが、子規についての、私の印象である。人物としてはすぐれた偉人だつたが、しかし、遠世の人ではなかつた。

左千夫は自分よりはるか年少だつた子規に師事した。左千夫は近代百年を通じて、比較のない程の大歌人である。左千夫は高山彦九郎をひとしほ「ゆかしき人」と思つてゐたが、たまたまその自筆の

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.